



ホンモノにふれ感性を育む授業づくり

「ホンモノ」にふれたときの感動は、子供たちの感性を磨くうえで、大きな効果があります。市教委では、本物にふれる体験をさせることで、心豊かな児童生徒の育成を図っています。そのために、平成17年度から、「ホンモノにふれ感性を育む授業づくり」を行っています。その一環として、本校では今日28日（金）に声楽家の志岐 由理子さんを講師としてお招きし、全学年で鑑賞しました。以下は、子供たちの感想です。



2年生：「めだかの学校」やいろいろなうたをうたって、はきはきして、ぜんクラスにきこえるように大きな声でうたって、うたのことを教えてくれてありがとうございます。わたしも大きくなったら、かしゅになって、せかい中にうたをとどけたいです。

4年生：ぼくはこのコンサートを聞いて感動しました。歌やなめらかさがいいなと思いました。ピアノのソロときれいな歌声が体育館中にひびいて、その歌声とピアノの重なりにもみこまれて、自分もこんなふうに歌えたらいいなと思いました。（後略）

5年生：志岐さんの流れるように全体にひびく歌声に、みりょうされました。その美しい歌声に美しいピアノの演奏がまじって、さらに美しく心に響く演奏になっていました。強弱がしっかりと表現されていて、自分も歌っているかのようなよい気持ちになり、一つ一つの歌のイメージに合わせたさまざまな歌い方があって、その歌の中の世界に入っているような感じがしました。（後略）

音楽委員長も終わりの言葉で「私たちが幸せな時間に引き込んでくださいました。私たちも音楽会では、心から歌を楽しんで、聴いている人にも楽しさが伝わるような合唱ができればいいなと思います。」と述べたことからわかるように、志岐さんの歌声を聴くことで子供たちは、豊かな感性を育むことができた様です。

ラグビーに見るSDGs

今朝、サモア戦に激戦の上、勝利したラグビーワールドカップですが、世界の大舞台でさらなる飛躍を目指す日本代表の選手たちが着用しているのが、特製の“桜ジャージ”です。今回、7代目となる日本代表ジャージは、「かぶと」をモチーフにした赤・白のボーダーをベースに日本伝統の吉祥文様もあしらわれています。そこにはファンとの繋がりを実感できる新たな試みが隠されています。なんと、ファンから募った古着を代表のジャージの一部にしているのです。古着は、2022年7月、国立競技場で開催されたフランス代表選などでファンから集められた1268枚からつくられたそうです。素材がポリエステル100%の古着は特殊な液に浸され、そこに熱と圧力を加えることで、ポリエステルが化学反応で分子レベルに分解され、新品と変わらない品質の樹脂ができるそうです。開発担当者は、「ファンから募った古着が代表のジャージの一部となることで、ファンと選手をつなぐ証になると考えました。選手も奮起し、応援する側も力が入る。まさに“ONE TEAM”となれる。そんなストーリーを描きました。衣類の廃棄という大きな問題に取り組む（持続可能な目標）も示したかった。」と話しています。さらに、耐久性は、フォワード用が4倍、バックス用が、3.6倍と大きく強化されました。通気性はフォワード用が162%、バックス用が40%向上し、軽くすることもできたそうです。次はそういう視点も加えてアルゼンチン戦を応援してみてもいいでしょうか？

